

## その 23

### 『萬葉集物語』の素顔



『萬葉集物語』改訂版

貧窮問答歌一首(并短歌)

「風交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜は すべもなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつつしろひ 糟湯酒(かすゆざけ) うちすすろひて しはぶかひ 鼻びしびしに 然(しか)とあらぬ ひげ搔き撫でて 我(あれ)を除(お)きて 人はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾(あさぶすま) 引き被(かが)ふり 布肩衣(ぬのかたぎぬ) ありのことごと 着襲(きそ)へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢え寒(こ)ゆらむ 妻(め)子どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ この時は いかにしつつか 汝(な)が世は渡る 天地(あめつち)は 広しといへど 我(あ)がためは 狭(さ)くやなりぬる 日月(ひつき)は 明しといへど 我(あ)がためは 照りや給はぬ 人皆か 我のみや然(しか)る わくらばに 人とはあるを 人並に 我(あれ)もなれるを 綿もなき 布肩衣の 海松(みる)のごと わわけさがれる かかふのみ 肩にうち掛け 伏廬(ふせいほ)の 曲廬(まげいほ)の内に 直土(ひたつち)に 藁(わら)解き敷きて 父母は 枕の方(かた)に 妻子どもは 足(あと)の方に 囲(かく)み居て 憂へ吟(さまよ)ひ かまどには 火気(ほけ)吹き立てず 甑(こしき)には 蜘蛛の巣(くまの)かきて 飯(いひ)炊(かし)く ことも忘れて ぬえ鳥の のどよみ居るに いとのきて 短き物を 端切ると 言へるがごとく しもと取る 里長(さとをさ)が声は 寝屋処(ねやど)まで 来立ち呼ばひぬ かくばかり すべなきものか 世間(よのなか)の道」

(風に交じって 雨が降る晩 雨に交じって 雪の降る晩 どうしようもないほど 寒いので 堅塩を 少しずつつまんで口に入れ 糟湯酒を ちびちびすすって 咳き込んで 鼻水をすすり ろくに生えてもない ひげを搔き撫でては おれほどの 人物はあるまいと 反り返ってはみるが 寒いので 麻の夜具を 引きかぶって 粗末な肩衣など あるもの全部 着重ねても 寒い晩なのに わたしよりも 貧しい人の 父母は 飢え寒がっていよう 妻や子は 何か下されと泣いていよう こんな時は どんなにして おまは世を渡っているか。

天地は 広いというが わたしには 狭くなったのか 日月は 明るいというが わたしには 照ってくださぬのか 人皆こうなのか わたしだけこうなのか。運良く 人に生れて 人並みに 五根も健全ではあるが 綿もない 粗末な肩衣の 海松のように 裂けて下がった ぼろだけを 肩に掛け 伏せ廬の 曲げ廬の内に 地べたに 藁を解き敷き 父母は 上座の方に 妻や子は 下手の方に 身を寄せ合って ぼやいてうめき かまどには 煙も出ていないし こしきには 蜘蛛が巣をつくり 米を蒸す すべも忘れて ぬえ鳥のように ぼそぼそものを言っている時に それでなくても 短い物を 切り縮めると いう諺

のように 鞭を持つ 里長めの声は 寢床まで 来てわめき立てる。こんなにも 辛く苦しいものか 世の中の道理というものは) 山上憶良(巻5・892)

「世間(よのなか)を 憂(う)しとやさしと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば」  
(世の中は いやなものだ消え入りたいと 思うけれど さて飛び去ることもできない 鳥ではないので)  
山上憶良(巻5・893)

3冊の『萬葉集物語』の「序」と「はじめに」を読み比べてきたが、ここからは本文を読み進むことにする。

まず、「目次」を見る。【初版本】、【改訂本】ともに、「一、はじめに」を含め、ともに20の章に分かれている。【初版本】の旧字体が、【改訂本】では新字体に改められていたり、表現が多少手直しされていたりしているが、そのほとんどが同じである。ところが、3つの章が、【改訂本】では、大幅に削除、改訂されていた。

その1つが、第3章である。【初版本】の見出し、「三、天子さまは神さま（皇室尊崇）」が、【改訂本】では、「三、治めるものと、治められるものと（社会）」にとって代わり、内容も大幅に書き換えられていた。

次いで、第10章、「十、萬葉人の考（思想感情）」は、【改訂本】も、「十、万葉人の考え（思想・感情）」と、見出しは同じだが、その内容は大幅にカットされ、表現も改められている。

そしてもう1つが、第15章である。「十五、防人の話（兵役と国防）」が、「十五、愛の歌（結婚）」に変わり、逆のイメージと言ってもいい「見出し」になっていた。もっとも、それは逆ではなく、むしろ、防人の歌は、実は紛れもなく「愛の歌」だったのだが、それらの話は後述する。

さて、大幅に書き直された、【初版本】の「三、天子さまは神さま（皇室尊崇）」から見てみよう。次のような書き出しから、天皇の物語が始まる。

<萬葉集が、千年も昔に書かれたものでありながら、昭和の今日まで、盛んに讀まれてゐる——いいえ、ますます盛んに讀まれ、又、研究されなければならないといふのは、萬葉精神が我々日本人に非常に大切なものだからなのです。では、萬葉精神とは、どのようなものでせうか？これをただ一口に申せば、まことにおそれ多いことですが、皇室、即ち天子さまに對する忠義の念であります。天子さまを大君と申上げ、大君への忠誠をあらはした歌は、今日の我々の胸を、強く強く打つからであります>

そして、この書き出しに始まる6頁分が、【改訂本】では、すべてカットされている。そのカットされた部分に、従五位下の官人田口益人が上野守に任ぜられ赴任する途次詠んだ2首の歌を物語風に紹介しているが、その内の1首が「田子の浦」の歌である。「田子の浦」の歌というと、万葉秀歌ベスト1に選んだ、あの山部赤人の「田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ 富士の高嶺に 雪は降りける」の歌が思い起こされるが、この歌が雄大な富士を詠った叙景歌の絶唱とされるのに対して、田口益人の「田子の浦」の歌は、天皇を称える歌として次のように書かれている。

<「晝（ひる）見れど あかぬ田子の浦 大君のみことかこみ 夜見つるかも」 田口益人（巻3・297）>

晝間みてさへ、見あきのしない田子の浦を、君命を奉ずる旅なので、夜見て行く事である、と、歌ひました。この歌を書いてある私の胸は、益人の心をおしはかって、感激にあふれてきます。あゝ！大君のために！！醜（しこ）の御楯となって、職場に赴いた萬葉人。父母を遠く故国において、遥かに九州へ下って行った防人。海行かばみづかばね、山行かば草むすかばね、とならむことを誓った萬葉時代の武人。そして、大君のために！！君命の重きを思って、田子の浦の美しい景色を夜見ても悔いなかった萬葉人、田口益人。實に、萬葉人こそは、天子さまへの忠誠に生きぬいた国民でありました。萬葉人の天子さまへの忠誠の心は、天子さまを生きていらっしゃる神さま（現人神）と信じたところから、ほとぼり出たものであります。

柿本人麻呂の歌に、『やすみしし』わが大君は 神ながら 神さびせすとという言葉があります。これは、「天子さまは神さまであらせられるから、神わざをなさる」といふ意味なのであります。そこで、天子さまは神さまであるといふ考へを、最もよく現した一つの歌がありますから、そのお話をしませう>

そして、この後、「柿本人麿と雷（いかづち）丘」として、雷丘の他の物語が語られる。

【改訂本】は、「三、天子さまは神さま（皇室尊崇）」が、前述したように、「三、治めるものと、治められるもの（社会）」と書き替えられて、「柿本人麻呂と雷丘」の物語から始まっている。

そして、その後に、「治められるもの」として、新たに「天平文化と庶民の暮らし」についての記述が加わることになる。

<美しいにおうばかりの天平文化が花ひらくが、(略)それは、貴族階級の文化であって、国民一般は天平文化とはまったくかけはなれた苦悩に満ちた生活をしていたのです>として、【初版本】にはなかった素晴らしい歌が、新たに提起されている。それが、冒頭に挙げた、山上憶良の「貧窮問答歌」である。

言うまでもなく、この歌は、憶良が筑前守の時、地方視察の折目撃した農民たちの貧しく悲惨な暮らしを詠んだもので、当時の庶民の姿を余すところなく伝えている。

著者が説明するそのくだりは、次のようである。

<奈良時代に、国民は「おおみたから」とよばれて、表面はたいへん重んぜられているように見えたが、実際は、租、庸、調の重い税をとりたてられ、そのために貧しい生活を営んでいました。万葉集の歌人の中でも、社会のようすをうたう歌人として有名な山上憶良が、そういう貧しい人々に同情して詠んだ「貧窮問答」の歌は、当時の国民の生活がどんなに悲惨であったかを、たいへん



たくみにうたっていますので、少々長いのですがあげてみましょう。これは、長歌で、問答の形式になっています>  
<このように、雪の降る晩、ぼろぼろになった着物をありったけ着て、なお寒さにふるえなければならないほど、貧乏であったこの人たちは、なまけものであったのでしょうか。また不運にも適当な職業をもなかつたからでしょうか。けっしてそうではありません。奈良の大仏殿をはじめ、唐招提寺などの大きな建築や、恭仁京に、難波京にとしばしば行われた遷都にかかった費用や労力は全部、国民が負担したものであることを考える時、この答えは明白でありましょう。あの輝くばかりの天平文化の根もとには、そして天皇が神としてあがめられるほどの強い国家ができあがったその裏面には、貧乏人の寝床にまで、納税のさいそくにやって来た、村長の杖のあったことを忘れてはなりません。しかしそれにもかかわらず、天皇へ忠誠をささげていた万葉人を、私は尊いと思います>

繰り返すが、著者は、この名歌「貧窮問答歌」を、憶良が「たくみにうたっている」と解説しているが、著者も、この歌について「たくみに」解説している。【初版本】にはなくて、【改訂本】に新たに加えられた、この「治められるものたちの悲惨な暮らし」は、忠君愛国や戦意高揚のためには都合が悪く、【初版本】では取り上げることができなかったのだらう。それにしても、立場としては、当時高級官僚の1人だった筑前守憶良が、「たくみに」歌に詠み、時世を批判しているわけだが、現代の政治家や官僚の中に、今の格差社会の中で苦しんでいる人々の暮らしの惨状を、このように訴えるスケールの大きな人はいるだろうか。

次に見るように、【初版本】から全面的にカットされることになる家持の「海行かば」の長歌の代わりに、【改訂本】で新たに取り上げられた憶良の「貧窮問答歌」は、それを補って余りある歌だったのである。

次に、「十、万葉人の考（思想感情）」の項を見てみよう。【改訂本】も、「十、万葉人の考え（思想・感情）」と、同じ見出しであるが、その内容、表現は大分改められている。【初版本】は、次のように始まる。

<「そんな、西洋崇拝の思想は、この際やめなくてははいけない。」とか、「あの人の思想は穏やかだ。」など、お父さまや、をぢさま方がおっしゃるのを、お聞きになったことがおありになりませんか。思想とは、考とでも申し上げたい>でせう。又、もっと深い意味に使へば、勉強して得た知識なども思想といへませう。たとへば、儒教（孔子の學問）思想とか、佛教思想などのやうに。

さて、それでは、万葉時代の人たちは、どんな考をもってあたか、又どういふ學問をしたので、どんな考へ方、即ち思想をもつやうになったか、といふことをお話申し上げます。まず、外国の影響を受けなかった、言いかへますと、日本固有の思想には、「天子さまを神とあがめる思想」と「祖先を尊び、名譽を重んずる思想」とがあります>

この部分は、【改訂本】では、次のように、やんわりと書き換えられている。



＜次に、方面を変えて、万葉時代の人たちはどんな考えをもっていたか、というお話をいたしましょう。

万葉時代は、大化改新の結果が美しく花咲いて、国全体が朝日ののぼるような勢いにあった時代でした。皇室は栄え、天皇はもっとも権力のある御方として、まるで神さまのように思われていたほどでありました。そして国民たちは自分の祖先はその皇室からの別れであると信じていましたので、祖先を尊ぶ思想が強く行われていました。万葉集にはそういう祖先崇拜の歌がたくさんあります＞

そして、【改訂本】では、この後から約 5 頁がカットされている。そして、その中に、あの重要な歌が入っていた。「海行かば」である。【初版本】の中にあつた次の文章がすべてカットされていたのである。

＜聖武天皇の御代に、奥州から金を献上した時、大伴家持が、はるばる越中国（富山縣）から奉った長歌があります。この歌には、祖先を尊ぶ思想と、家名を重んずる思想が、強く歌はれてをります。この長歌の中に、あの武人精神の現はれとして有名な、

「海行かば 水づくかばね 山行かば 草むすかばね 大君の 邊にこそ死なめ かへりみはせじ」

（巻 18－4094 大伴家持）

「海で戦ったなら、屍を水にひたし、山で戦ったなら、屍を野にさらして、草の生える事もいはず、天子さまの御ために死にませう。我身かへりみるやうな事はしますまい」の句が入っています。

この「海行かば」の句は、武人の家柄である、大伴氏（家持が當主です）と佐伯氏（大伴氏の一族）が、代々語り傳へて来た家訓即ち家の誡めでした。天平二十一年（皇紀一四〇九年）奥州から黄金を奉った時に、聖武天皇はお喜びのあまり、臣下たちに詔を賜はりましたが、その中に特にこの文句をお書きあそばされたのでした。

家持は感激しました。我が家の家訓を、かしくも詔の中にお用ひあそばされたのですもの、どんなに名誉なことであつたでせう。ここで家持は、上は、皇室の御繁栄を壽ぎ、下つては大伴一族の武人としての覚悟のほどを、一篇の長歌にして現はして、天子さまに奉ったのでした＞

「海行かば」が詠み込まれた長歌についての記述である。「海行かば」と言うと、【初版本】の表紙の見返しに、万葉仮名で書かれていた「海行者美都久屍山行者草牟須屍～」は、「海行かば」の原文だった。裏表紙の見返しも同じデザインが使われている。また、【初版本】の「序」でも、いきなり「海行かば」の歌について言及されるなど、何回かこの歌について触れている。何より、本文中、3 回にわたって、この歌を取り上げているが、他の歌ではそのような例はない。

ところが、【改訂本】では、これらのすべてが削除され、「海行かば」の歌はその影も形もなくなることになる。

この長歌は、東大寺の大仏建立のために必要な金が産出したことを賀（ことほ）ぎ詠んだ歌だが、当代一の大事業である大仏に因んで詠まれた歌は、この 1 首だけだったにもかかわらず、【改訂本】からは、その唯一の歌がなくなってしまったのである。

書き替えられていたもう1つの項目が、「十五、防人の話（兵役と国防）」だった。

【初版本】で、＜最近、国防といふことが、いかなる國家にとっても、非常に大切であるといふことは、皆さまもよく御存じの事と思ひます＞という書き出しで、14頁にわたって、＜遠く九州の果てまでも、国防のために喜んで出かけてある＞、＜現代と同じように徴兵制度が行われてゐた＞として、防人の歌を8首紹介している。その内の1首が、＜「今日よりは かへりみなくて 大君の しこの御楯と 出立つわれは」  
（今日からは、自分のことは省みず、天皇の楯となって出征し、命がけで敵と戦うのだ）

火長今奉部与曾布（巻 20・4373）＞

この歌は、戦時中、万葉集の中の最高傑作と評価されたこともあるが、この「醜の御楯」という言葉が、軍歌「海ゆかば」と並んで軍人の心構えとして軍国教育に使われたことはよく知られるところだ。

しかし、家持が収集した98首の防人の歌は、そのほとんどが妻や恋人への思いや父母や子との悲しい別れを詠んだ歌で、忠君愛国の歌はわずか3～4首とされている。しかも、忠君愛国の象徴ともなった、この「醜の御楯」の歌が、実は10人の班のリーダーである火長が、そのつらい思いは他の防人たちと同じでも、火長としてはそんな思いを振り払い、健気にも自らを奮い立たせて詠った、なんとも切ない歌と解釈されている。

かくして、「十五、防人の話」の章はすべてカットされて、新たに「十五、愛の歌（結婚）」という、まったく異なる内容に差し替えられたのである。

果たして、「防人の歌」は完全にカットされてしまったのか？まさか、それまでは、と疑問に思い探してみると、その1部が、他の章に移されていた。「十七、東国の歌（東歌）」の中である。【初版本】では、14頁にわたっていたが、【改訂本】では、8頁に簡略化され、取り上げた歌の数も8首から6首に減って、東歌の章に移って、生き残っていたのである。東国から徴兵された防人たちの歌だから、東国の歌であることは間違いがないが、防人の歌は、やはり、東歌ではなく、防人の歌だろう。「序」で取り上げた「醜の御楯」の歌も残ってはいたが、【初版本】では、＜国防のために喜んで出かけてある＞と解説したこの歌については【改訂本】では、次のような説明が付けられていた。

＜この歌は戦争中、もてはやされた歌です。こんな忠君の情をわき立たせて出発した防人もありますが、あとにのこした妻や子に思いをはせて涙ながらに南へ行った人もありました＞となっており、【初版本】で＜涙ながらに南へ行った人もありました＞など書いたら、戦意高揚の妨げになるため書くことができなかったのだろう。つまり、防人の歌が持つ本意を、著者は当然のこと理解しながら、書くことができなかったものと思われる。

そして、【初版本】の「二十、をほりに」の最後で、著者は、次のようにも記している。以前、その一部を紹介したが、カットされた全文を改めて引用する。

＜私たちは、今、元寇以来の、そして元寇以上の国難に向かってゐます。この現在の日本人に最も必要なのは、祖先以来わが國民を貫いている精神、即ち日本精神を知ることです。私たちの祖先が、どんなに天

子さまに忠義であったかを知る事です。どんなに國を愛し、國を護ったかを知る事です。私が皆さま方のために、この萬葉集物語を書きましたのも、その事を皆さまにお知らせするためにほかなりません。

皆さま、どうぞ萬葉精神をしっかりと心につけて、あの「大君のために、父母をおいて我が身をかへりみることなく、御楯となって、海行かば水づく屍にならう」と誓った、萬葉人のやうな忠義な人になって下さい。そして、さういふ忠誠の心をもった萬葉人を、私たちが尊敬するやうに、皆さまも後世の日本人たちから、称賛されるやうな人におなりにならなければなりません。

しかし、少年少女の皆さまの務は、戦野に赴くことではありません。りっぱな銃後の國民となることこそ、天子さまへの忠、日本への愛国であります。皆さまは先ずこの聖戦下の、りっぱな銃後の國民となることをおはげみ下さい。今度の聖戦は、日本開国以来の大事件として、やがて歴史に記されることとせう。そして、その時の日本人が、如何にりっぱな生活態度をしてゐたかという事も、その時あはせて記されますように>

言うまでもないが、<萬葉精神をしっかりと心につけて>と力説するこの部分は、【改訂本】の<おわりに>では、この部分はすべてカットされているだけでなく、それに代わって書き加えられた「あとがき」も、万葉集について総括することなく『萬葉集物語』は終わっている。

万葉集が忠君愛国の道具として利用され、戦意高揚のために重装備を施された『萬葉集物語』の【初版本】は、戦後の改訂によって、その装備が解かれ、万葉集の真の姿形、その素顔があらわになったのだ。「万葉集の素顔」、それが、【改訂本】であり、【復刻本】だったのある。そのことはとりもなおさず、【初版本】、つまり、もともとの『萬葉集物語』の素顔は、時代の趨勢からやむを得ない面も確かにあるが、まさに忠君愛国、國民を戦争に駆り立てるための軍国教育の本だったことを示している。『萬葉集物語』は、子どもたちにとってなんとも残酷な、まさに『萬葉集残酷物語』だったのである。そして、それが、当時の子どもたちの心に、果してどのような影響を与え、どのような記憶を残したのだろう。

新元号令和が、国書として初めて「万葉集」から引用されたことはなんとも喜ばしいことだが、これまで見てきたように、万葉集は、むしろ、忠君愛国や戦意高揚のために引用され、利用されてきたという負の歴史があったことを忘れることはできない、いや、忘れてはならないのである。

